

海へ！釧路のたからものを探す冒険 2009

～ようこそ、シャチの海へ～

協力：大阪コミュニケーションアート専門学校（OCA）、福岡 ECO コミュニケーション専門学校（FEC）、観光ガイドの会、
釧路市民活動センターわっと、ICERC 国際イルカクジラ教育リサーチセンター

後援：釧路市、釧路市教育委員会、釧路市観光協会、フィッシャーマンズワーフ MOO、北海道放送株式会社（HBC）
室蘭市観光協会、伊達市教育委員会

実施報告書



2009年11月

この事業は、競艇の交付金による日本財団の助成を受けています。

海へ！釧路のたからものを探す冒険 2009

報告書 目次

1 企画意図	p3
2 実施内容	p 3
1. 環境教育展示	p 4
2. 専門家による講演会	p 4
3. 調査同行型子供体験エコツアー	p 5
4. 専門家による釧路沖海洋調査	p 6
5. アンケートによる意識調査	p 7
3 実施の詳細・成果・反省と課題	p 7
1. 環境教育展示	p 7
2. 専門家による講演会	p 9
3. 専門家による釧路沖海洋調査	p 10
4. 専門家による釧路沖海洋調査	p 12
5. アンケートによる意識調査	p 13
最後に	p 1 6
付 録	
* メインメンバー紹介	
* 2009 釧路実施事業一覧	
* アンケート集計	
* 2009 ちらし	
* 航海コース サンプル	
* 海鳥発見記録	
* 鯨類調査レポート（速報版）	
* 報道記事	

企画・実施 Orca.org さかまた組



all texts and images by Orca.org さかまた組

許可なきご使用や転載は、ご遠慮下さい。

1 企画意図

海洋生態系の頂点に君臨するシャチは、他に類を見ない個性的な体色パターンや2メートルを超える背びれといった見かけ上の個性と、優れた運動能力、知能の高さ、社会性の強さなどで、世界中に熱狂的なファンを持つ、海のスーパースターだ。鯨に興味がある人もない人も、シャチの名は誰もが知っているはずだ。そのような認知度の高さと裏腹に、その生態について知る人は少ない。といっても、彼らについては一般の人々だけでなく、専門家のとってても未知の部分が圧倒的に多い生き物というのが現状だ。

彼らは、そのインパクトの強さで環境教育の格好の素材、あるいは観光資源としての価値が世界的に評価されているが、シャチを安定して観察できる海域のない日本沿岸では、彼らを対象とした調査も、環境教育の一環としてのウォッチングツアーも実現は不可能と考えられてきた。

ところが近年になって、日本沿岸でもシャチをターゲットにした科学調査やツアーの実施の可能性が高まってきた。海域は、釧路沖だ。この海域には秋になるとシャチの群れが来遊し、季節的に定住しているようだということが、2003年から私たちが継続している海洋調査の結果で明らかになってきた。釧路は、世界にわずか数ヶ所しかないシャチ観察ポイントに加わるだけの資質を持っているのだ。

2008年秋より、私たちは、大阪と福岡の専門学校と協同で継続している調査で得た6年間分の科学データをもとに、釧路沖の海の生き物たちの実態と社会的・環境教育的価値を地域の住民に伝えることで、この海域の力強さ・素晴らしさを広く認知してもらおうと、釧路市内で活動に取り組んでいる。主な実施内容は、環境教育展示と体験ウォッチング、専門家による講演会である。環境を守ろうとしたとき、もっとも堅固な活動基盤となりうるのは、地域の住民による組織だ。そのような組織を作るためには、まず第一に、科学的知識の獲得や体験に基づく自然への理解が不可欠と考える。海の大切さを日常的に実感している私たちは、展示や体験ツアーの企画を通して、地域住民が自然と野生動物の美しさ、貴重さを知り、それらを守ることがいかに大切かを、自ら考えられる素地の育成への寄与を事業の目的とした。この地域に、目の前の海を積極的に保全していく機運が生まれ、それがいつか教育や経済面で地域の活性化につながることを願っている。

2 実施内容

- 1．環境教育展示（写真、ビデオ、実物大模型の展示と、調査成果報告）
- 2．専門家による講演会（釧路沖鯨類、海鳥、海洋生物音響）
- 3．調査同行型エコツアー（地域住民対象）
- 4．専門家による釧路沖海洋調査

企画は展示、講演会、調査、エコツアーで組み立て、展示観覧者とツアー参加者を対象にアンケートによる意識調査を行った。

1・環境教育展示

今年は、フィッシャーマンズワーフ MOO、コーヒーショップタリーズ釧路店での展示を主催したほか、市立博物館との共催で教育展示を同時開催した。展示会場を分けて同時開催したのは、利用者の年齢、住所、興味のある無しを問わず、より多くの市民や観光客の目にとまるようにと考慮した結果である。展示内容は、昨年と同様に写真や文字、音、映像による展示で釧路沖に関する最新の情報を身近に感じられるように配したが、今年は、それに加え等身大の平面模型でシャチの群れを再現し、リアルな雰囲気をかもし出すように留意した。



釧路フィッシャーマンズワーフMOOでの展示



コーヒーショップでの展示



釧路エコフェスタ会場での展示



釧路市立博物館の共催展示会場

2・専門家による講演会

展示とエコツアーで組み立てた昨年と、今年の取り組みとで、一番大きな違いは、専門家による講演会の開催である。さかまた組の特色である海洋環境に関する専門性の強さを生かし、それぞれの知識をより多くの地域住民に還元できるように、複数の会場での講演会を、実施日を変えて開催した。

講演会のほかにも、ツアー参加者へのレクチャーを、乗船時とその前後に行った。



釧路沖のシャチの話をする海洋生物調査員 笹森琴絵



海鳥の専門家・小城春雄北大名誉教授による講演会



海洋生物音響学者 赤松友成博士による講演会@釧路市立博物館

3・調査同行型子供体験エコツアー

昨年に引き続き、地域住民が親子で参加できるツアーを、今年も実施した。航海時間は各5時間程度で、観察対象は釧路沖の海鳥、キタオットセイなどの鰭脚類および、イルカやシャチなどの鯨類である。これらの動物の観察をしながら、釧路沖の海洋環境や、海洋生態系についてのレクチャーを専門家が随時おこなった。

ツアーは2日間を設け、それぞれ10組ずつの親子を募集した。ツアー当日は乗船前と下船後に「専門家レク

チャー」を行い、乗船前に釧路沖の海洋環境の特殊性や出現する海洋動物についての説明を、下船後に発見種の確認などを行い、これらと航海との組み合わせで全7時間の行程とした。



釧路沖の生物や注意事項に関する乗船前レクチャー



同・下船後レクチャー



釧路沖調査同行ツアーで、イルカに歓声をあげる親子



ガイド役の学生と記念撮影する参加者

4・専門家による釧路沖海洋調査

さかまた組独立での専門調査は4日間行い、シャチの来遊を確認すると共に、カマイルカ、イシイルカ、ネズミイルカ、ミンククジラ、ナガスクジラなどの鯨類、クロアシアホウドリ、コアホウドリ、エトピリカなどの希少な海鳥を観察した。



噴気をあげるナガスクジラ。まだ13mほどの若い個体



調査結果は毎日展示会場で報告した

5・アンケートによる意識調査

展示開催会場の担当者、環境や教育分野の市民団体関係者、展示やレクチャー、ツアーなどへの参加者やその保護者を対象に、アンケートを実施した。内容は、自然や動物への潜在的な興味・関心の度合い、イベントを通じた意識の変化の有無などで、今後の継続の可能性や課題も探った。(別紙参照)

3 実施の詳細・成果・課題と反省

1・環境教育展示

【実施場所・日程・内容】

*釧路エコフェスタ：9月27日 於 釧路 国際交流センター 観覧者：のべ160人

- ・ポスター：A1サイズ×3枚、A2サイズ×4枚
- ・写真：A2サイズ×4枚、A1サイズ×1枚
- ・DVD上映「シャチの集う海」 (HBC提供)
- ・等身大 平面模型：1体(高橋俊男氏作製)

*釧路フィッシャーマンズワーフMOO：10月7日～11月4日 於2F広場 観覧者：のべ1970人

- ・等身大 平面模型：6体(高橋俊男氏作製)
- ・写真：B1サイズ×4枚、A0サイズ×6枚、A2サイズ×4枚、A4サイズ×4枚
- ・DVD上映「シャチの集う海」 (HBC提供)
- ・調査報告および教育展示：(OCAおよびFEC、さかまた組提供)
A0サイズ×1枚、A1サイズ×2枚、A2サイズ×2枚、A3サイズ×2枚、
B1サイズ×1枚、

- ・布製等身大キルト：1枚（OCA提供）
- ・子供用具体物：動物クイズファイル、立体パズル×2個、動物フィギュア×3個（FEC提供）
シャチパズル、シャチクイズファイル（2冊）（OCA提供）
- ・展示用海生ほ乳類カタログ 2枚（WDCS提供）

***Tully's Coffee 釧路店：10月8日～30日 於 店内ギャラリー 観覧者：のべ2000人**

- ・等身大 平面模型：1体（高橋俊男氏作製）
- ・写真：B1サイズ×7枚、A0サイズ×2枚（さかまた組、HBC提供）
- ・調査報告および教育展示：（OCAおよびFEC、さかまた組提供）

A0サイズ×1枚、A1サイズ×1枚、A3サイズ×3枚、B1サイズ×3枚、

***釧路市立博物館：9月23日～10月1日 於 マンモス広場（エントランス）および 特別展会場**

- ・写真B1サイズ×7枚、A2サイズ×10枚（さかまた組提供）
- ・調査報告および教育展示：（OCAおよびFEC、さかまた組提供）

A1サイズ×3枚、A2サイズ×2枚、A3サイズ×3枚

【成果と課題】

今年の展示では、写真と映像が中心だった昨年の内容に加え、実物大の平面模型を加えた。特に会場が広いMOOには子供や親子を含む6体を群れに見立て、設置した。模型の形は図鑑にあるような全身像ではなく、シャチのさまざまな行動が船上の私たちにはどのように見えるかを再現した。期間中は親子がよく訪れ、子供たちがシャチと並んで記念撮影する光景も見られた。

昨年と同様、会場提供団体からは多大な理解と協力をいただいた。昨年との違いといえば、アンケートに「釧路沖の自然を、環境教育的にも観光振興的にももっと活用できるはずだ」と答えていた関係者が多かっただけに、今年は自分たちの活動として主体的に考えてくれていた印象が強かったことだろうか。

会場は、地域、年齢、職業、性別、興味関心度で、観覧者層に偏りが出ないように、できるだけ多くの方が、意図的・偶発的を問わず観覧できるように複数箇所に設定した。結果として、こちらの期待どおり種々様々な人々が写真や映像を観覧したことがアンケートへの回答からわかった。

会場提供団体の言葉によれば、展示会場への来場者数は通常よりも多いそうで、このように知的好奇心を満たす内容の展示を行うことが、住民の自然保全意識の喚起や観光客の地域への関心強化に寄与するだけでなく、人を集め経済を活性化させる意味でも正の効果が期待できると実感した。

今後については、実際の動物を見た人の感想が聞きたいという要望の声にこたえ、より現実味のある内容を盛り込むと同時に、視覚だけでなく、他の感覚（聴覚や触覚）にも訴えるような展示を目指したい。

釧路沖シャチアンケート

Q クジラやイルカに興味がありますか？
 1:かなりある 2:少しある 3:あまりない 4:まったくない

Q どうして興味があるのか教えてください
 1:動物としての魅力がある 2:食べ物として
 3:その他 ()

Q 釧路沖にシャチがいると知っていましたか？
 1:知っていた 2:聞いた事はあった 3:知らなかった

Q 今までに、海でイルカやクジラを見たことがありますか？
 1:ある (田村 町) で 2:ない

Q 釧路沖にクジラやイルカを見に行きたいですか？
 1:行ってみたい 2:条件次第で行ってみたい 3:行きたくない

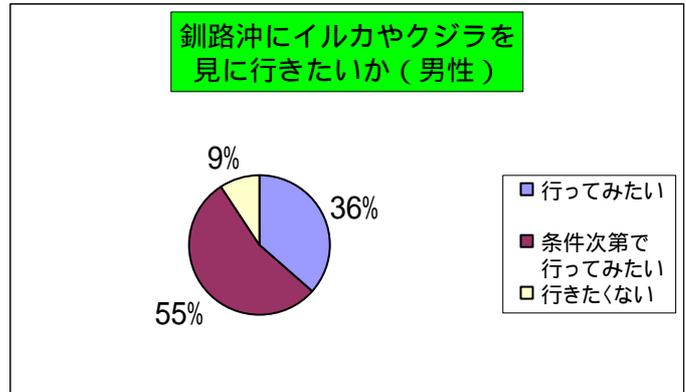
Q 乗船料はいくらまでなら払えますか？
 1:1万円 2:7000円 3:5000円 4:3000円

Q クジラやイルカにあうまで船に乗る時間は？
 1:7時間 2:5時間 3:3時間 4:1時間

Q 展示についてご意見・ご感想があれば教えてください
 ()

ご協力ありがとうございました。よろしければ可能な範囲で以下の質問にお答えください
 郵便希望ですか？ はい 2:いいえ (_____ から来ました)
 性別 (男 () 女 ()) 年齢 (40代) 職業 (会社)
 定例のクジラやイルカを写真に撮りたいです。是非！

アンケートへの回答例



展示会場におけるアンケートの結果 (詳細は5. アンケートで)

2・専門家による講演会

* さかまた組 主催「釧路のシャチのお話し」講師 笹森琴絵 (海洋生物調査員・自然写真家)
【実施日時】 10月10日 (@釧路市民活動センター わっと) 17:30~19:00
【参加者数】 大人16人 子供15人
【スタッフ数】 3名 (さかまた組)
【実施内容】 釧路沖の海洋環境と鯨類、特にシャチの回遊状況や生態についての子供向けスライドショー

* さかまた組 主催「世界と釧路をつなぐ海鳥たち」講師 小城春雄 (海鳥専門家 北海道大学名誉教授)
【実施日時】 10月17日 (@フィッシャーマンズワーフ MOO 2F広場) 17:00~19:00
【参加者数】 大人36人 子供3人
【スタッフ数】 3名 (さかまた組)
【実施内容】 釧路沖の海洋環境と、飛来する海鳥について、大人向けに解説。

* 市立博物館・さかまた組 共催「クジラたちの音の世界」講師 赤松友成
 (水産総合研究センター主任研究員 海洋生物音響学)
【実施日時】 10月31日 (@釧路市立博物館 講堂) 18:00~20:00
【参加者数】 大人40人
【実施内容】 海洋生物の音の利用状況、および海洋調査における音響学的アプローチの実際

【成果と課題】

これまでは自らの暮す地域の自然についてなかなか知る機会のなかった地域住民が、多角的かつ科学的な視

点から釧路沖の素顔に触れられるように、環境や海鳥、鯨類、音響学の専門家によるレクチャーでプログラムを組んだ。また科学的な内容であっても、誰もが受け入れやすいように、写真や映像、実際の音や海図などの具体物を取り入れた。

昨年の活動で、一番多かった要望が、「講演会の開催を」というものだった。写真や映像で訴えることも必要だが、同時に講演会を開催し直接語りかける場を設けることは、素晴らしいからものを持ちながら実感をもてない地域住民に誇りと責任、そして環境保全の必要性を感じてもらうきっかけづくりには、より効果的だといえる。同時に私たち自身にとっても、住民の意識レベルを肌で知り、彼らと活動主体である私達の温度差を埋めて現実味のある活動へと結びつける大切なチャンスとなる。

実際、参加者らの表情や感想、質問から伝わってくるのは、純粋な驚きと感動、地域への誇りだった。「何十年も暮らしていたのに、何も知らなかった」「それほど重要な事実なのに、私たちはどうして気づかなかったのか」「シャチは、カナダやホッキョクにいるものだと思っていたのに、意外と身近でびっくりした」など、感想はいずれもとてもシンプルである。それだけに、彼らの驚きや感動が純粋であったことを伺いしれる気がする。地域を誇りに思い大切にしようとする意識は、まず知ることから始まる。その意味ではようやく自然を「保全する」入り口に立った釧路の人たちと共に、この環境を守っていくために、今後も、多様な専門家を招き、魅力ある釧路の海をキーワードに、行政や環境教育や自然保全に取り組む地域グループとのつながりを強化し活動の更なる充実を計りたい。

3・調査同行型子供体験エコツアー

【実施日時】10月17日、25日（18日より順延） @釧路沖 最大20海里）

【参加者数】17日：14名（子供8名、保護者6名）

25日：13名（子供7名、保護者6名、ICERC ボランティアガイド11人）

【スタッフ数】17日：14名（専門家3名、OCA&FEC 学生11名、引率スタッフ2名）

25日：14名（専門家3名、ICERC ボランティアガイド11名）

【実施内容】専門家調査（海洋環境、海鳥、鯨類、海洋生物音響）同行型エコツアー

【使用機器など】ハイドロフォン（東京海洋大学提供）、外部スピーカー、ハンディ GPS、双眼鏡、デジタルカメラ、デジタルムービーカメラなど

説明用動物写真ファイル

【スタッフ名】専門家：小城春雄（海鳥、海洋環境）、千嶋淳（海鳥）、西澤敏（映像、音響）、笹森琴絵（鯨類）

研修スタッフ：OCA&FEC 学生11名、引率スタッフ2名（OCA、FECより各1名）

【協力】東京海洋大学（ハイドロフォンシステム一式提供）、ICERC Japan（国際イルカクジラ教育リサーチセンター）

【成果と課題】

現在の日本の教育現場においての重要課題に、感受性が豊かな小学生から中学生の間いかに“本物”に出合わせられるかがある。今や世界の最重要懸案事項となっている環境保護に必要性に関する理解や保護活動については、「良質な経験の場の提供」と「科学的に正しい知識の伝達」が不可欠である。これらを実現する手法を持っている私たちが、自らの専門性を駆使して、社会人としての義務を果たそうとするのがこの取り組みである。世界の海洋調査の最前線を舞台に活動する専門家集団であるさかまた組メンバーと行動を共にした子供たちが、

科学的知識の探求に興味を持ち、いつか地域の自然や文化を研究する人物が生まれてくれれば本望である。

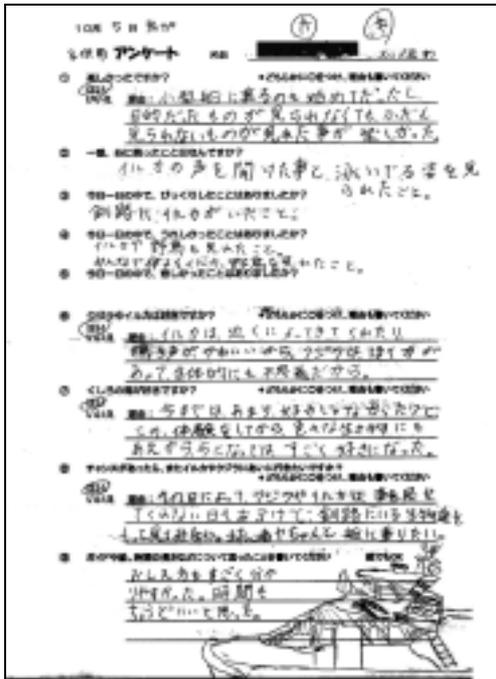
釧路で子供を海に連れ出す取り組みを始めた昨年、参加した子供たちは「クジラには興味があったが、釧路沖にシャチがいるとは思っていなかった」「釧路の海で、船からイルカを観られると知ってなんか嬉しい」と述べた。イルカやクジラとの出会いを求めて世界中を旅する大人は多いが、イルカやクジラが好きなのは、子供も同様だ。なぜかわからないが、これらの野生動物たちは、私たちの心に憧れや共感といった独特の印象を与え、興味を抱かせる。

ツアーは、海鳥や海洋音響学の部分でも学べるようプログラムし、くしろの海を多角的に楽しめるように配慮した。船酔いや時間をもてあます参加者の続出が予測できたので、昨年と同様、ガイドとしての事前指導と訓練を施した学生と社会人ボランティアを、参加者 1 組に 1 人の割合で配した。ガイド役は安全確保のための責任ある行動や動物の解説など、ガイド役をこなすための学習を終えた専門学校の学生や、東京を拠点に全国規模で活動する団体による派遣の社会人ボランティアである。乗船時はもちろん、乗船前から解散まで担当した参加者のケアをしてもらった。これらガイド役の参加者は、子供と共に航海した経験から、また違った意味で環境保全の必要性を意識したようだ。同行した担当教官らは、前回と同様、今回の取り組みを通じて学生たちに人間的な成長があったと感じている。

自然の中で自分の目でみた大洋の雄大さと野生動物たちのたくましさは、参加者の心に強い印象を残したはずだ。自然界に足を踏み込むことで自然や動物に与えるダメージについては熟考が不可欠とはいえ、子供や若者が自然に触れることで得られる、人間としてよく生きる、強く生きる、大きな流れの中でもものを見るなどの心の成長や価値観の変化は、自然保全意識の育成と同様に企画者の意図・予想をはるかに超えて大きい。釧路沖が海況の不安定さ、動物出現頻度の不安定さ、時間の長さなどで体験ツアーの場としてはハードルの高いことを思う主催者の不安をよそに、参加者は自身の人間としての成長にとって、得がたい経験の場として受け入れたようだ。参加者からは、「楽しかった」「また来年も行きたい」という声が多く聞かれた。毎年少しずつでも海のファンを増やすことで、自然への興味や愛着心が地域に根付き、私たちの究極の目的である地域住民による自然保全活動へと発展してくれるよう願っている。

今後の釧路沖ウォッチング実施における目標としては、シャチとの遭遇の実現である。シャチの圧倒的な存在感、崇高なまでの美しさは私達の表現を超えたところにあり、厳しい自然の中で実際にその姿を見ることそれだけで、環境教育や保全の動機付けが完結するような存在だ。この動物が隣人だと知るとは、釧路の住民が地域の自然に誇りを持つ最大の理由となるだろう。

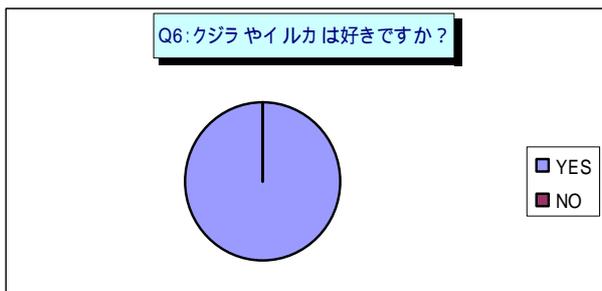
なお、全ての行事の実施にあたっては、地域に根ざした活動とするために、地域行政、環境・教育・地域おこし関係の市民団体などと連携しながら取り組むことを前提に準備や活動を行った。実際に、応募者の取りまとめ、問い合わせへの対応などを市民活動センターに依頼することで、昨年よりもスムーズかつ確実な募集活動ができたと感じている。地域の市民団体や行政機関と、常時情報の交換と共有が行う努力をすることで、事業期間中の連携もよりスムーズかつ確実なものとなり、教育的・経済的ツールとしての釧路沖の価値を一層効果的に活用できると期待できるはずだ。



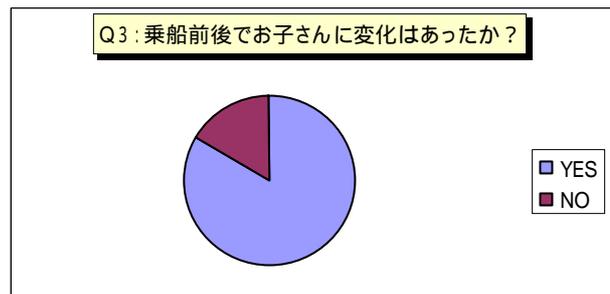
アンケートへの回答 子供 A



アンケートへの回答 子供 D の母親



子供アンケート結果 (詳細は5 . アンケートで)



保護者へのアンケート結果 (詳細は5 . アンケートで)

4・専門家による釧路沖海洋調査

【実施日時】 10月10、12、23、24日 (さかまた組主催 専門家調査)

10月14、15、16、19日 (専門学校調査)

10月17、25日 (調査同行型子供体験ウォッチング)

【実施海域】 釧路港を基点に、離岸最大20海里の半円内

【総スタッフ数】 19名 (専門家5名、OCA&FEC学生11名、引率スタッフ3名)

【実施内容】 船舶を用いた海洋調査 (専門学校実習 および 海洋環境・海鳥・鯨類・海洋音響の専門調査)

【使用機器など】 ハイドロフォン (東京海洋大学提供)、外部スピーカー、ハンディ GPS、双眼鏡、デジタルカメラ、デジタルムービーカメラ など

【専門家名】 メイン: 小城春雄 (海洋環境・海鳥)、西澤敏 (映像 北海道放送株式会社)、笹森琴絵 (鯨類)

【協力】: 東京海洋大学 (ハイドロフォンシステム一式提供)

【成果と課題】

調査では、4年連続でシャチを確認した昨年までと異なり、彼らを確認できなかった。だが、10月前半までは確実にいたことが漁業者らからの情報でわかっており、調査が始まる直前に北海道を直撃した台風が当該海域における秋季の海洋生態系に大きな影響を与えたと考えられる。

現在、専門学校と共同で、過去に遭遇したシャチの個体識別用カタログを作成しているが、データの更新は来年へ持ち越された形となった。今年は初めてナガスクジラを確認し、昨年初のザトウクジラに続き、発見種数を増やした結果となった。

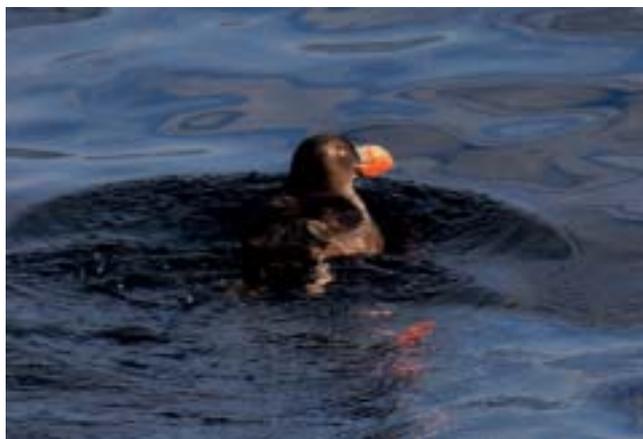
環境保全を行うためには、まずその自然の仕組みを知る必要がある。釧路の海については、漁業資源を調べる調査が数多く行われているが、環境保全目的の海生生物をターゲットとした基礎的調査はほとんど行われていない。さかまた組では、2003年から釧路沖で調査実習を行っている専門学校と連動して、釧路の海で調査を行ってきた。私たちが得た知見が子供ウォッチングに還元されてより刺激的なプログラムへ発展していくと共に観光面でも安定した野生動物との出会いの提供が期待できるようになり、それにより安定的な観光船の運用が可能となれば地域経済へ貢献すると共に釧路の海について更なる知見をもたらすことになる。いい意味での循環を作り上げたい。

本調査における主な発見種（詳細は別紙）

- * 海鳥 17科52種
- * 鯨類 2亜目3科5種



調査で発見したナガスクジラ



日本沿岸では絶滅が危惧されているエトピリカ

5・アンケートによる意識調査

【実施日時・対象】

1. 展示観客向けアンケート 10月7日～11月4日（於；フィッシュマンズワーフ、Tully's コーヒー）
2. ツアー参加者向けアンケート 調査実施後に本人と保護者向けアンケートを自宅へ送付、回収

【対象数】参加者27名、展示会場2箇所68名

【結果と課題】

展示会場ごとに実施した観覧者向けアンケートでは、昨年に引き続き、鯨類への興味の度合い、釧路沖海洋環境や生態系への知識の普及度、観察の機会があった場合の参加意志の有無などを探った。
(別紙1～2 グラフ)

1. 展示会場全体におけるアンケート回答

回答者の99%が、イルカやクジラに興味がある、その理由は生き物として魅力があるからと答えている。ところが、それでいて釧路沖にシャチがいることを知っていたのは半数の48%に過ぎなかった。いと知った人の96%は、見に行きたいと答えている。

会場別の回答のまとめは以下。

* 展示観客向けアンケート@フィッシュアマンズワーフ MOO (有効回答数38)

この会場には、観光客も多く集まる。市民だけでなく外部の人々についても、どんな風に釧路を見ているか、海洋都市としての釧路についてどれだけ知識が広まっているか、観光地として何を望んでいるかなどについて知ることができた。

* 釧路市民、観光客、男女共に100%の人が生きものとしての鯨類に魅力を感じ、美しいと感じているが、* 釧路沖に来遊するシャチについての知識は、全体で45%ほどだった。シャチがいると知っていたのは、女性が多かった。釧路沖のシャチについて知っていたと答えたのが、市民の48%に対して、観光客が71%とはるかに多かったのが興味深かった。* 観察の機会があれば、参加したいと希望しているのは、市民、観光客、男女に差はあまり見られず、いずれも90%以上であった。

* 展示観客向けアンケート@Tully's コーヒー (有効回答数30 市民70%、市外・道外30%)

この会場は、繁華街の真ん中にあり、性別や年齢層・社会的立場を問わず、市民に昼夜よく利用されている。主に市民が、自分の暮らす町についてどれだけの知識を持っているか、海については何か知識や興味を持っているか、シャチがいると知ってどう感じるかなどについて、幅広い層を対象に知ることができた。

* 釧路市民、観光客、男女共に97%の人が生きものとしての鯨類に魅力を感じ、美しいと感じているが、* 釧路沖に来遊するシャチについての知識を持つ人は、やはり多くなく全体で43%ほどだった。シャチがいると知っていた人は、やはり女性に断然多かった。釧路沖のシャチについて「知っていた」と答えた人は、MOO に比べると差は小さいが、こちらやはり市民が43%に対して、観光客が44%とわずかながら多かった。* 観察の機会があれば、参加したいと希望しているのは、市民、観光客、男女ともに大半で、いずれも90%を超えていた。ただし、時間や価格などの条件しだいという人がMOOでの回答数よりも圧倒的に多かった。

コーヒーを飲みに入った喫茶店で偶発的に展示を見た人々と、展示を見にわざわざ足を運んだ可能性が高い人が多いMOOとでは、いくつかの設問への回答で明らかな差異があった。一つは、釧路沖にシャチがいると知っていたかという設問への答で、コーヒーショップでは43%、MOOでは58%で過半数を超えていた。また、知った上で見に行きたいかという質問に行きたくないと答えた人は、MOOでは3%、コーヒーショップでは7%、さらに行きたいと答えた人も、コーヒーショップでは40%で「航行時間、料金などによる」とあり、もろ手をあげてというよりも、むしろ慎重であることが伺われた。

それでも全体としては、シャチに興味がある、美しいと思っているという人が90%を超え、海の生き物、特

にシャチが、年齢、性別、社会的立場を問わず人気のある存在であることが知れた。環境教育を進める上でシャチをシンボルとして取り上げていくことが動機付けとして適当で、取り組みを効果的にしやすいことを示した。また、参加条件の許容範囲に対する個人差は大きい、釧路沖における海のツアーが観光資源として有力であることの可能性をも強く示唆した結果だったといえよう。

意見・感想は概して肯定的だった。また実物大模型が面白い、もっと写真を見たい、シャチの折り紙教室があればよいなど、積極的に意見をのべて展示の内容を身近に引き寄せたいという意識がうかがわれた。またこの展示をきっかけに、* 釧路沖についてもっと知りたいと感じた * 興味深く勉強になったといった、釧路沖に関する科学的知見に知的好奇心を刺激された旨の意見があった。

2. ツアー参加者向けアンケート（有効回答数 子供：6 保護者：3 *11月24日現在）

ツアーに参加した子供たちと彼らの保護者を対象に、意識調査を行った。アンケートには親子で一緒に記述ができるよう、後日、ガイド役の学生らと共に撮影した写真を同封して自宅へ送付した。

乗船した子供15人（小学生～中学生）の回答からは、ほとんどの子供がもともとイルカやクジラが好きで、釧路沖にイルカやシャチがいるとほとんどの子供が知らなかった昨年と比べ、今年参加した子たちには知っている子が増えていることがわかった。増加の原因は、釧路沖についての昨年の私たちの活動にあるようで、鯨類が身近に存在していたという事実が、釧路の子供たちにとっていかに魅力的な情報であったかを象徴しているように感じられた。彼らは、* 釧路沖に魚だけでなく、鳥やクジラなどの生きものがいて感動を覚え、* 釧路沖に興味をわき、好きになった と答えている。さらに、ほとんどが親の勧めで乗船したケースだった昨年とは異なり、今年は100%が本人と両親の双方の希望で参加を決めていた。100%が* 楽しかった * またチャンスがあったら乗りたいと希望している。5時間を越す乗船時間にも* あっという間だった * もっと乗りたいと肯定的で、初めての海や動物たちの魅力がいかに印象強かったかを思わせる。* ガイドさんがいて楽しかった という意見も昨年と同様にいくつかあった。最後の最後に待っていたイルカとの出会いがよほど楽しく嬉しかったようで、全員がイルカについて、興奮気味に感動を表していた。

また保護者向けへの回答からは、* 積極的に海での様子を話し、* 海や環境についての番組や図鑑を良く観るようになった と、乗船後の子供の変化の様子が読み取れた。また機会があれば乗せたいか？という問いには、100%が * また乗せたい、もしくは * 親子で乗りたいと希望し、* 日常という小さな枠から出て、大きな世界を見ることができた * 日常生活では決してであうことのない大切な経験を親子でできて感動した などと感想を述べていた。

アンケート結果をみると、日常的には海に出たりクジラを見たりする機会のない人々も、潜在的には憧れや興味を持っていることがよく現れており、彼らの知的好奇心を刺激し、理解を得られれば、釧路沖を舞台とした環境教育の実践や、海やクジラを町の観光資源として活用することは容易であると感じられた。また、シャチやイルカへの憧れは強く、彼らとの触れ合いが、人間形成に良い効果をもたらすという考えも持つ人が多いことも、展示会場でのアンケートや、ツアー参加者の保護者からの答えからわかった。ツアーに参加した子供たちの反応からは、船に乗るといった特別な経験をしたことや自分の町の魅力をみつけた喜びが強く印象に残っていることがわかった。さらには海や動物に共感もち、知識をさらに得たいと図鑑を開くようになったという保護者からの声もきかれ、このような取り組みの教育的効果を積極的に肯定している。

これらの結果は、釧路沖海洋環境についての知識普及や意識の変革が、働きかけ次第で容易に進む可能性を

感じさせる。もちろん、今現在に彼らが抱いているような感動や感想は一過性が強く、心に根付くのは難しく、いつしか日々の生活の中に埋もれてしまうものだ。かといって環境教育のために「船で海に出る」という行為の前には、時間や費用、酔いや寒さなどのハードルが立ちばかり、なかなか簡単に実現できることではない。けれども展示や講演といった不特定多数を対象とした陸上での知識の普及活動と組み合わせながら、実体験の場の提供を継続することで、地域の海への好奇心や愛着を着実に育てていくことができるはずだ。

釧路を訪れている観光客にとっても、鯨類観察ツアーが現地で参加できる選択肢として非常に魅力的であり、料金、時間、見られるものなどによっては、90%以上が参加したいと考えていることもわかった。同じ北海道の知床や噴火湾などでは海の動物や景色を観察対象としたツアーが根強い人気を誇っている。阿寒湖と釧路湿原という素晴らしい自然に恵まれた釧路市にとって、さらに「海」に目をむけることは、森と川と海とが繋がった「命のゆりかご」としての釧路周辺環境への郷土愛を育み環境保全活動を進めるうえで有効なばかりでなく、前出の地域と同様に、観光地としての発展の可能性を一層高めることを示唆している。

最後に

5年の調査を経ての地域住民への成果還元は関係者全ての悲願でしたが、これを初めて実現させた2008年に引き続き、今年はさらに内容を充実させる形で継続させることができました。

事業の実施にあたっては、昨年と同様、釧路市さま、釧路教育委員会さまに、市民の信頼を得るうえで大きな支えとなっていたいただきました。

観光協会さま、観光ガイドの会さまにはイベント告知のための活動に多大なご理解とご協力をいただきました。

釧路市立博物館さま、フィッシャーマンズワーフMOOさま、タリーズコーヒー釧路店さまにはそれぞれ、会場、展示用器具、そして手厚いご協力を無償で提供していただきました。

市民活動センターわっと、釧路シャケの会のみなさまには、実施にあたり細やかな心遣いと実際的なご協力をいただきました。

北海道新聞釧路支社さま、釧路新聞さまには、親身で重厚な記事の掲載で読者と私たちをつなぐ役割を果たしていただきました。

そしてツアーに応募して下さった市民のみなさん、参加して下さった子供達と保護者のみなさん、講演会に足を運んで下さったみなさん、展示を眺めアンケートに答えて下さったみなさんには、また来年もがんばろうと思えるだけのエネルギーをいただきました。

日本財団さまには、これらのイベントを完遂できるだけの助成をいただきました。

みなさんに心からのお礼を申し上げます。

本当に、ありがとうございました。

なお、シャチは9月の中旬から10月の台風前日までは、ほぼ毎日姿が目撃されていました。海洋環境のバロメーターである彼らしい行動だと苦笑いしつつ、「市民のみなさんに知らせる活動を地道に続けなさい」と海に言われた気分です。いつか釧路のみなさんがご自分の目でシャチを見、一生忘れられないような体験ができるまでがんばりたいと、思いを新たにしています。

Orca.org さかまた組
メンバー同